

桜と書と学会と



有楽町駅に隣接して東京国際フォーラムが位置し、第113回内科学会が行われた。長い歴史で今年には会場の桜が迎えてくれて嬉しい。久しぶりに春の訪れを感じつつ、医学の進歩を学んだ。近年重要視されているのが患者の立場による医療や医の心などである。

氏の書はなぜ人の心を揺さぶるのだろうか？
 ① 短歌・詩・書の各領域で類い稀な卓越した基盤、
 ② 歩んだ道は涙なしに語れず、数多の苦難に對峙、
 ③ 安易な慰めの言葉はなく、厳しさと優しさが共存、
 ④ 長文の詩を凝縮した句などが挙げられよう。

心のビタミン No.198



同会場のB1には「相田みつを美術館」があり、企画展「書と出会ったとき」が開催中。氏の書には心地よいリズムが内在している。感銘を受けた書は「悠遊(serenity)」

空を見上げていつか、
 ゆったり悠遊、雲も鳥も…
 look up the sky, tranquility, serenity, calmly…

美しい書、奥深い日本語、対訳の英語という三つの領域が融合しているようだ。平穩、晴朗、平静、落ち着き、安らか、和みなど、うららかな春の情景が、昔の記憶と共に心の中に蘇ってきた。

書の探求は古典や哲学の研究や人生や人間に對する熟考へと導く。「聿(ひで)」と関連する漢字をみると、学芸や音楽の要素を包含するようだ。
 このたび桜の花片が風に舞つながら、私は氏と心温まる交流が少し生まれたように感じた。気づきを大切に自身の役割を考えていきたいと思う。
 (医師・音楽家 板東浩)

書…聿+日(者) 聿で書く人
 筆…竹+聿 竹で作られた聿
 津…シ(水)+聿 聿が潤う
 建…廴(行)+聿 聿を立てる
 律…亻(行)+聿 リズム良く書く、呂律、音律、音楽